



垂水郷土芸能保存会

垂水の
盆踊り

（垂水区の音頭）

発行 令和元年 8月吉日



垂水区長
八木 真

このたび、区内の伝統的な行事・文化・芸能の保存・伝承を目的とした垂水郷土芸能保存会の活動におきまして、「垂水の盆踊り―垂水区の音頭―」が発刊されますことを大変うれしく思います。

垂水区では各地区において、7月下旬から8月にかけて、地域のお祭り等において地域毎の伝統的な音頭が披露され、垂水の夏を彩る風物詩となっています。盆踊りが民衆の娯楽行事となって全国に広まり、垂水の各地区に伝わる際には、地域の方々の思いに応じた音頭が形作られ、今に受け継がれてきています。戦争により一時途絶えるなどの背景もありながら、地域の思いで復活を遂げ、近年では保存会や婦人会の方々を中心に、児童・生徒への踊り方の指南や、曲調のアレンジなど、若い世代に合わせた工夫を試行しながら、音頭継承に向けた取り組みがなされています。

本冊子では、垂水区の音頭における現在の姿を捉えるとともに、各地区の皆様からの実際の声をお聞きすることで浮かび上がった音頭の変遷や歴史をお伝えできるものとなっています。

こうした各地区の特色ある音頭を克明に記録し、後世に継承する本冊子の発刊は、まことに意義深いこととであり、垂水郷土芸能保存会の皆さんをはじめ、作成にあたって中心的な役割を果たしていただいた各地域の伝統行事に携わる皆さんのご尽力に改めて感謝申し上げます。

この「垂水の盆踊り―垂水区の音頭―」を読まれた全ての方々が地域の歴史や伝統文化を再認識し、今まで以上に垂水への愛着と誇りを持っていただくことができるよう心から祈念いたします。



垂水郷土芸能保存会
会長 藤田 勝尋

皆様方にはご清祥の毎日とお慶び申し上げます。このたび、垂水郷土芸能保存会において、垂水区において親しまれている音頭の保存と継承のため、垂水区の音頭の歴史や踊り方、歌詞等をまとめた冊子を作成することとなりました。

作成にあたっては、各地域の皆様からの音頭に関する資料のご提供、貴重なお話をお聞かせいただくな

ど、大変多くのご協力をいただきました。おかげさまで垂水郷土芸能保存会としての冊子の完成に至りました。

冊子の作成に関係された皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。

本冊子が、今後、垂水区の音頭の継承に役立つことを願い、ごあいさつとさせていただきます。

目次

「ごあいさつ」……………1

開催場所の変遷……………3

舞子音頭……………5

垂水音頭……………7

塩屋音頭……………9

多聞音頭……………11

舞子音頭の踊り方……………13

垂水音頭の踊り方……………14

塩屋音頭の踊り方……………15

多聞音頭の踊り方……………16

下畑・名谷（東名）の盆踊り……………17

ご協力者・参考文献……………18

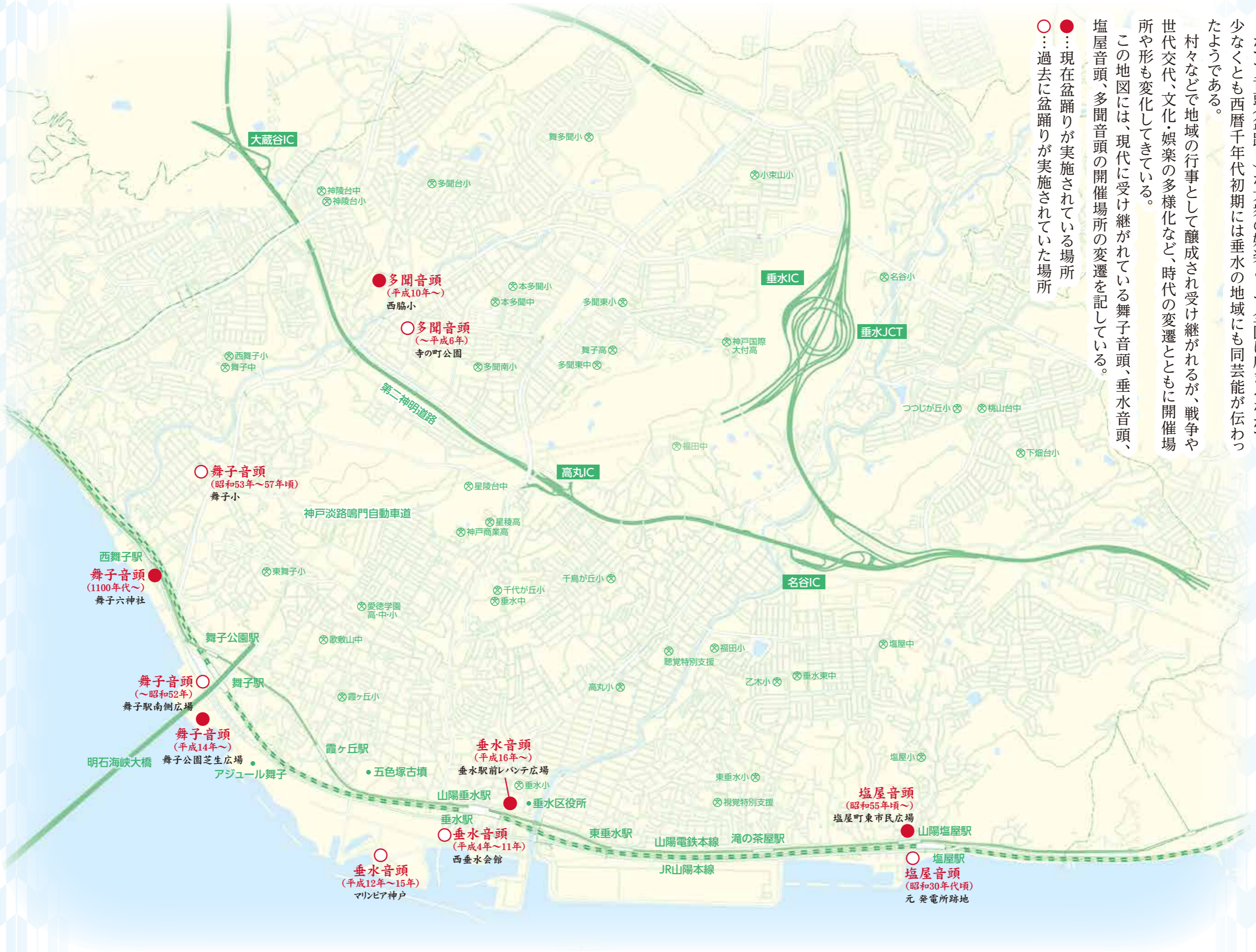
開催場所の変遷

かつて音頭（盆踊り）が大衆の娯楽として全国に広まるなかで、少なくとも西暦千年代初期には垂水の地域にも同芸能が伝わったようである。

村々などで地域の行事として醸成され受け継がれるが、戦争や世代交代、文化・娯楽の多様化など、時代の変遷とともに開催場所や形も変化してきている。

この地図には、現代に受け継がれている舞子音頭、垂水音頭、塩屋音頭、多聞音頭の開催場所の変遷を記している。

- ……現在盆踊りが実施されている場所
- ……過去に盆踊りが実施されていた場所



舞子音頭



舞子の盆踊りは、舞子駅南側にかつてあった広場で櫓を組んで踊られていたが、都市開発によって駅前の広場が使えなくなり、昭和53年に舞子六神社境内に場所を移して開催されるようになった。舞子六神社境内では櫓を組めないが、開催であったが、平成14年からは明石海峡大橋のたもと瀬戸内海と淡路島を臨む舞子公園内の芝生の広場を使えることとなり、再び櫓を設置して賑やかに開催されている。播磨ノ国播州舞子音頭保存会の川崎聰和氏の話しによると、平成25年頃には数年に渡って舞子小学校と連携し、生徒に踊りを教えるとともに、運動会で観覧者も参加する総踊りを行ったということがある。

盆踊りで唄われる舞子音頭は独特の節回しで歯切れもよく、旧明石郡で発展した。音頭には一定のテンポやメロディがなく、昔から口説き語りや歌い継がれてきた。四ツ竹、鐘、太鼓などの囃子方のリズムに乗って音頭取りが朗々と唄い上げ、櫓のまわりを囲みながら皆で踊る。音頭には「舞子音頭」と「舞子音頭数え唄」の他、かつては「鈴木主水」や「坊主落し」なども唄われていた。現在は、舞子音頭保存会が婦人会と連携して音頭の保存、継承に取り組んでいる。

舞子音頭

ここは播州 舞子の浜よ
前に見ゆるアリア淡路の島よ
舞子よいとこ 松の名 名所
松は松でもアリア主をまつ
わたしや君ゆえ 舞子の浜で
いつも青青アリアまつばかり
沖のかもめも 舞子の浜よ
波の鼓にアリア波の琴
まつて主様 見えない時は
松の露やら涙が落ちる
落ちた涙が 松露となるに
せめて涙の その固まりを
淡路島から 吹きくる風は
夜毎舞子のアリア松なぶる
淡路島から 千鳥が通う
いく夜寝さめのアリア須磨の閑
通う千鳥に 持たせてやつて
主に見せたい私の心
舞子よいとこ お月さんの名所
夜毎逢う人うとうて来る
なぜか今宵は 姿を見せぬ
高く上った あのお月様
主の笑顔を 写してほしい
うたが聞こえる 太鼓や鐘も
ほんに今宵は 盆踊りぢや
舞子音頭の始まり 始まり

(原本川崎聡和氏提供
古池治平氏解説による)

舞子音頭数え歌

一ツトサアのエー「エエエ」
人目にめしかけ その前は番台引
きつれ 出かけるはもどろかいな
二ツトサアのエー「エエエ」
文の返事は たもどろかいな
りもつ もろのうの 渡そつかいな
三ツトサアのエー「エエエ」
三ヶ月ご紋の片妻は おかずに
かんびようしいたけや ゆばたに
こうやに鯉節
四ツトサアのエー「エエエ」
よくせき逢いたい 由良之助 逢
はずに帰るは残念な 逢はそうか
いな
五ツトサアのエー「エエエ」
いつせき求めた与市兵衛を あとから
おやじと呼びとめる 定九郎かいな
六ツトサアのエー「エエエ」
娘のおかるは祇園町 殿ごのためじ
やと身を売りて つとめろつかいな
七ツトサアのエー「エエエ」
何も知らずに妹が 文をやるとは
いじらしや もどそつかいな
八ツトサアのエー「エエエ」
山科としての嫁入りは 力屋のお
屋敷もうここか はずかしいわいな

九ツトサアのエー「エエエ」
こむ僧姿でほんぞうが 吹き来る
門口二階から ご無用かいな
十ツトサアのエー「エエエ」
十うと仇きも討ておうて 仇きが
討てたか果太鼓 評判かいな



● 舞子音頭保存会のみなさん



● たるみっこまつりにおいて披露



● 孫文記念館(移情閣)を背景に



● 明石海峡大橋を背景に



● 上空からの様子



● レバンテ広場にて

垂水音頭



新垂水音頭

(まくら唄)

ソリヤエーエーエー
さあさこれより お粗末ながら
音頭とります 姿よく踊れ
時間くるまで つとめましょう

(新音頭)

ここは神戸の 垂水の浜よ
前に見ゆるは 淡路の島よ
五色塚より 瀬戸見わたせば
こちら舞子から あちら淡路まで
遠く四国路 その先までも
産業文化の 架け橋となり
瀬戸の夕陽の あかねに映えて
見事浮き帯 錦絵模様
明石海峡 大橋こそは
吾ら郷土の 大きな宝
これぞ日本の 誇りなり

(つなぎ唄)
ちよいとこころで 調子を変えて
五色流しと かかりましょう

新五色流し

(垂水の四季)

垂水名物 数ある中で
春は弥生の 花見の頃に
ワカメ干しやら イカナゴ漁と
鳴賑わう 垂水港

夏は七夕 鳥居の下で
行燈かけやら 打ち上げ花火
揃いの浴衣で お盆の踊り
子供賑わう 海神社

秋は稲穂の 色づく頃に
揃いのハッピに 鉢巻き姿
若い力で おみこし担ぐ
町も賑わう 秋祭り

冬は白波 打ち寄せ返す
夕陽に映えて そびえる姿
淡路と結ぶ大吊り橋は
パールブリッジ 新名所



垂水音頭の歴史は古く、1600年代後半には既に存在していたと云われている。明治から昭和初期にかけて特に盛んで、お盆には村中の老若男女総出で夜通し踊っていた。戦時中から中断・復活を繰り返して、平成4年に地元有志により垂水音頭保存会が結成された。毎月1回の音頭・囃子・踊りの稽古とともに、毎年8月14・15日に開催する垂水駅前レバンテ広場での盆踊り大会や地域イベントを通じて、保存・継承を続けている。

音頭は「丹波与作」、「お寅加平次」、「八百屋お七」等の物語を取り入れ、その時の状況に応じて、ゆったりとした段文音頭の中に、語りや軽快なテンポの流し音頭を入れて、変化に富んだ曲になっている。

平成10年に明石海峡大橋完成記念として歌詞を公募してまとめ、現在は新垂水音頭・新五色流しとして、わかりやすく新しい歌詞で唄われている。また、垂水音頭保存会の北條節子氏・内藤洋子氏の話によると、小学1〜2年生に踊りを教えて、運動会で上級生とともに披露するといった活動も10年ほど続けているとのことであった。

(よいとこ垂水)

ここはよいとこ 垂水のまちよ
潮のかおりに 安らぐまちよ
ひとみ明るい、子供らの
渚に遊ぶ、アジニール舞子
若者憩う マリンピア神戸
明日をひらく 人々の集い

ここはよいとこ 垂水のまちよ
潮のかおりに 安らぐまちよ
海峡をまたぐ 大橋は
未来をつむぐ 若者の誇り
世界に届け 垂水の笑顔
世界に届け 平和の願い

(むすび唄)

もつこの先 やりたいけれど
よせという声 かからぬうちに
まずはこころで つとめましょう

塩屋音頭



塩屋音頭は江戸時代中期に塩屋に伝わったと云われており、娯楽の少ない時代で老若男女が楽しめる催しの一つであった。当時は安養寺近くの広場で8月14・15・16日のお盆に夜通し踊られていたと伝えられている。

戦争により一時途絶えていたが、青年会の主催で復活し、昭和30年頃には塩屋谷川の河口東側にあった鉄道の発電所跡地で盛大に踊られていた。その後、青年会の解散により再び中断することとなるが、故須磨合定二氏が昭和30年頃に唄った吉川音頭の録音テープが発見され、故西村五二氏（大正12年生）らの努力により復活することとなる。録音テープの音質が悪く、音頭の文句も節も正確な記録が無かったが、古老の記憶を頼りに苦勞しながら何とか再現された。

昭和53年には中村守氏と山本作造氏が音頭をとり、「八百屋お七」を1時間くらい、また「巡礼おつる」を少し踊っていたことである。昔は他に「鈴木主水」、「石童丸」などの音頭をよくとっていた。

塩屋音頭保存会の吉田昭彦氏、北川保幸氏の話しによると、近年の盆踊りは8月23、24日に地藏盆が開催された後に、塩屋町東市民公園に櫓を組んで、西向地藏に飾った提灯を移して、毎年8月24、25日に開催していることである。塩屋音頭はゆつたりとした曲調で、1曲が40、60分とやや長いが、ここ数年は若い世代にも親しめるよう現代風にアレンジしたり、本番前に講習会を開催しているとのこと。

戦後に盆踊りが復活した頃には、中心に立てた丸太に線を張って提灯を飾った周りで踊っていたが、故西村五二氏より現在の櫓が寄贈されたことである。盆踊りは8時頃から開始され炭坑節や塩屋音頭などを踊る。合間に挟む休憩時には、地域の寄付を基に飲み物やお菓子が振舞われ、夜の10時、11時頃まで踊られているということであった。

塩屋音頭 八百屋お七（短縮版）

アーヨーイヤーアーヨーイヤー
伊達娘恋の色事八百屋のお七
寺は駒込吉祥院と
吉祥院と言う寺に
寺の小姓で吉三と言つて
男振り良、前髪育ち

目元パツチリ鼻筋通り
何処から見ても良い男
お七がほれるのも無理もない
ある日、吉三は机にもたれて
学問しなされる後ろから
ひごで突くやら目で知らすやら

お七は吉三に打ちむかい
申しこれいな吉三へ
私し本郷へ帰らにやならぬ
吉祥院と我が家と
道はいかほどへだつとも
この事互いに忘れじと

本郷は二丁目角引廻した八百屋店
八百屋のお店の売りものは
しいたけ、こまつたけ、いわたけ、きく
らげかもなんきんや塩屋のり
しそと五所柿、ほうづきなすが、
とうがらしに、たてなんきん三葉に

竹の子、白うり
かもうり、十八さげにえんげ豆
数も色々八百屋の店よ
お七我が家に帰って見れば
ゆられてお七うた、ね枕
もう一度我が家が焼けたなら

恋しい吉三に会われよと
眠れぬ心は唯一筋に
しとねもぬらす我が家の夕立ち
一輪のわらにと火を付ける
火はパツと一度に燃え上がる
見るよりお七は火の見やぐらに
かけ上り

火事だ火事だと半鐘打つ
このこと誰知るまいと思つたに
恋のかなわぬ腹いせからに
お七の家から一軒二軒三軒目の頭
ちやびんの釜屋のブヘイがとんで出て
お七が火つけと訴人する

奉行役人はや立ち出でて
お七追いたて回りをかため
そこで奉行のおつしやる事に
そなたの歳はいくつで名はなんと
私は十五で御座居ます
聞いて役人言葉をまげて

いやいやそなたは十四であろうがな
いいいな
私は十五でひのえの馬で七月七日
の誕生日で
それでお七と名のります
十四と言えは助かるに
十五と言つたばかりに

あわれやお七は法の罪
八百屋お七のこの一席も
それじゃこらで打ち上げまして
後のご先生にたのむとしよ



● 昔の音頭取りの様子



● 西向き地藏尊



● 塩屋町東市民公園での盆踊り

多聞音頭



多聞音頭(播州音頭)は口説き語りといわれ、一定のテンポやリズムがない。4個の竹片を片手に2片ずつ持ち、それを手の中でうち合わせて音を出す四ツ竹、鉦、太鼓などの囃子方のリズムに乗って、音頭取りが語り唄い上げ、それに合わせて踊っていた。「多聞今昔」(昭和55年発行・荒尾義夫著)によると、8月14、15日に青年会が大門の庭で簡単な屋台の四隅に真竹を立て、赤提灯を吊るして飾り、太鼓と音頭に合わせて踊りの輪が二三重にもなり、遅くまで賑わって踊られたと記されている。娯楽の少ない時代で、盆踊りは地域の行事として親しまれていたようである。

近年に至って、寺の町公園で開催されていた盆踊りは、平成7年の阪神淡路大震災によりしばらく中断し、平成10年に、「西脇地域福祉センター」を拠点にした「西脇ふれあいのまちづくり協議会」が発足したのを機に、同協議会主催で、西脇小学校の「夏祭り」が開催されることとなり、盆踊りもその中で開催されることとなった。多聞管理会が盆踊りの櫓や太鼓、提灯を出して祭りに協力し、翌年からは「多聞音頭(播州音頭)」もプログラムに加わり、多聞管理会参加の諸団体と共に、祭りをさらに盛り上げている。

多聞音頭保存会の藤原敏弘氏、山内秀世氏、今岡勝美氏の話によると、「西脇ふれあい夏祭り」は、毎年7月第4土曜日に開催されており、数年前からは「多聞音頭」を現代風に変えた「新多聞音頭」も加わり、子どもたちに人気のアニメ曲から炭坑節まで、櫓の下では幅広い世代が踊りを楽しんでいるとのことである。

新多聞音頭

ここは垂水の 多聞の町よ
 気候穏やか 人情も厚い
 川を挟んで 西脇ごさる
 多聞西脇 昔はひとつ
 今はふれあい 心はひとつ
 さあさ踊ろよ 皆輪になつて
 今日は楽しい ホラ盆踊り
 子供大人も チョイト出ておいで

古く多聞も 田舎の村よ
 一家総出の 百姓仕事
 雨や風の日 嵐のあの日
 心休まる 日などはなくて
 ほんにわずかの 楽しみ事は
 鬼追い 獅子舞 夏盆踊り
 村を離れた 人々ごぞり
 村中総出の 一大行事

かつて西脇 一面たんぼ
 中を流れる むかしの川よ
 春はあかもと 水面に跳ねて
 蓮華たんぼば じゅうたん模様
 秋は稲穂が 黄金と揺れて
 とんぼつりした あの畔野道
 西の山には 松茸ごぞり
 松露 しばはり 今では夢か

多聞名所に 多聞寺ごさる
 春は正月 鬼追い祭り
 赤青婆の 三匹鬼が
 片手たいまつ 左右に乱舞
 さあさ播きましょ 三方の上の
 白や 赤餅 大鏡餅
 撒けば村人 老若男女

私も先にと 群がり拾う
 夏は心字の 池カキツバタ
 仁王門をくぐれば 庭一面の
 花はむらさき 心がなごむ
 秋はもみじの 花綾錦
 涼し境内 色とりどりに
 心洗わる そのたたずまい

方や名所は 多聞六神社
 古い歴史に 威厳が匂う
 鳥居くぐれば 八十段の
 長い石段 苦しや楽し
 秋は若衆が 一堂に会し
 豊作祈願の 獅子舞踊り
 子供みこしも 町中練つて
 戻りや木遣の 声高らかに
 本殿お旅所 ぐるりと回り
 日永一日 お祭り日和

晦日迎えりや あの参道の
 照らす石段 提灯あかり
 明けりや新年 心も新た
 お厄払いの 善男善女
 列をなしての 初詣人
 今年一年 幸多かれと
 合す両手に 願いを込めりや
 東お山に 初日が昇る

町のはずれに お地藏ごさる
 子供見守り 幾百年よ
 風雨に耐えて 早や幾星霜
 込めて感謝の お化粧直し
 二千五年の 春吉日よ

小東山には 黒松ごさる
 昭和天皇 お手植えの松
 戦後間もない 行幸植樹
 今の多聞は 大きな町も
 半世紀前は ど田舎暮し
 六十余軒の 小さな村で
 屋根の葺き ちとちとそに
 主婦の洗濯 山田川中
 道は地道の 細道小道
 バスも通わぬ 孤島の村よ
 徒歩で舞子の 小学校へ
 歌中 山越え 星陵台の
 尾根を伝つて 九一時間
 バスが初めて 通った時は
 舞子ゴルフ場の 開設時で
 昭和三十 七年の春よ
 わずか定員 十六人で
 みんな それでも 大喜びで
 満員バスの 毎日だった

今じゃ多聞も 神戸の中で
 押しも押されぬ 豊かな町よ
 市民住民 益々増えて
 心つながる あなたと私
 垂水警察 真近に控え
 家内安全 裏道小道
 春夏秋冬 笑顔で暮らしや
 花も笑もある 多聞の未来

数え歌

ソラ ひとつと サノエー
 人は知っている 多聞寺
 正月 鬼追いお餅撒き
 嬉しいわいな

ソラ ふたつと サノエー
 二人そろつて 初詣
 末は夫婦と 枝結び
 大吉みくじ

ソラ みつと サノエー
 南風吹く 春弥生
 桜の名所は 多聞台
 お花見弁当

ソラ よつと サノエー
 嫁に来るなら 多聞町
 幸せいっぱい 夢いっぱい
 長寿の町よ

ソラ ひとつと サノエー
 つもにここに 地藏さんは
 町の子供の 守り神
 ありがたや ありがたや

ソラ むつと サノエー
 娘十八 夢見頃
 白のお馬の 王子様
 迎えに来てね

ソラ なつと サノエー
 長い伝統 それぞれに
 伝え伝えて 保存会
 末代までも



● 寺の町公園での盆踊り(昭和59年)

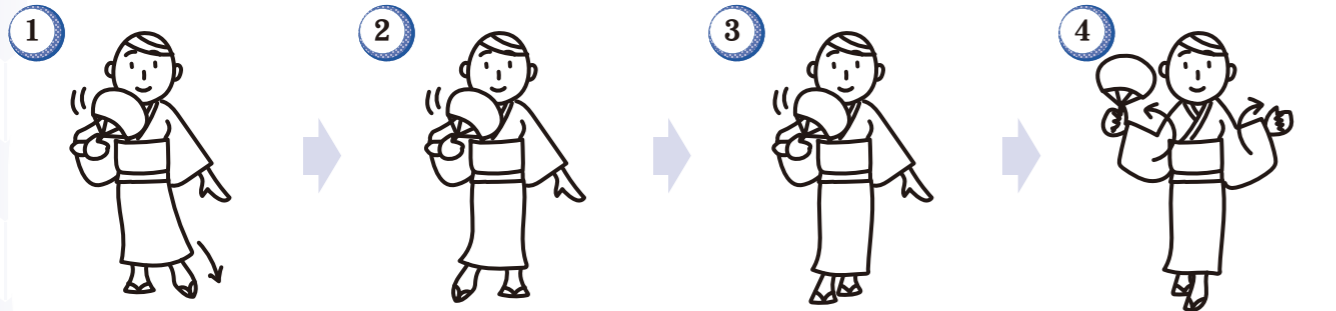
垂水音頭の踊り方 (新垂水音頭)

動画はこちら



舞子音頭の踊り方

動画はこちら

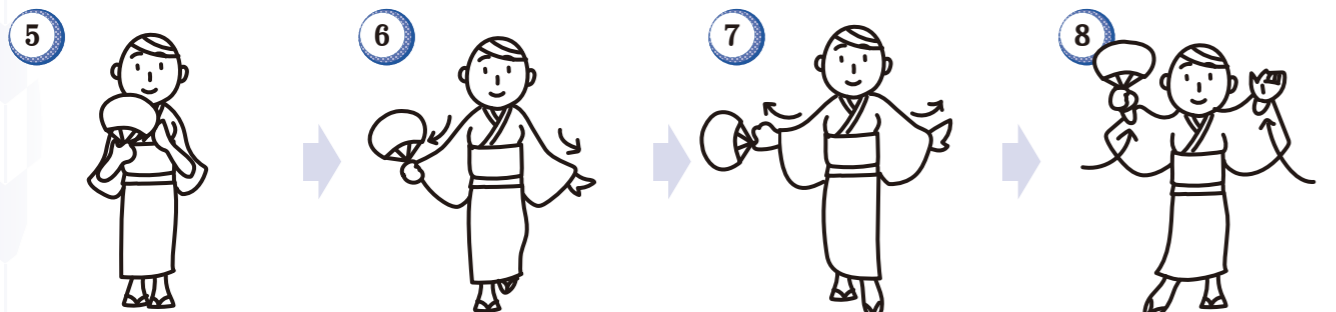


1 右手で団扇を持ちあおぎながら、左足をななめ前へ、その後左足に右足をそろえる。

2 団扇をあおぎながら、右足をななめ前へ。

3 左足を右足にあわせる。

4 左足を前に出しながら、胸の前で外に向かって両腕で円を描くようにまわす。

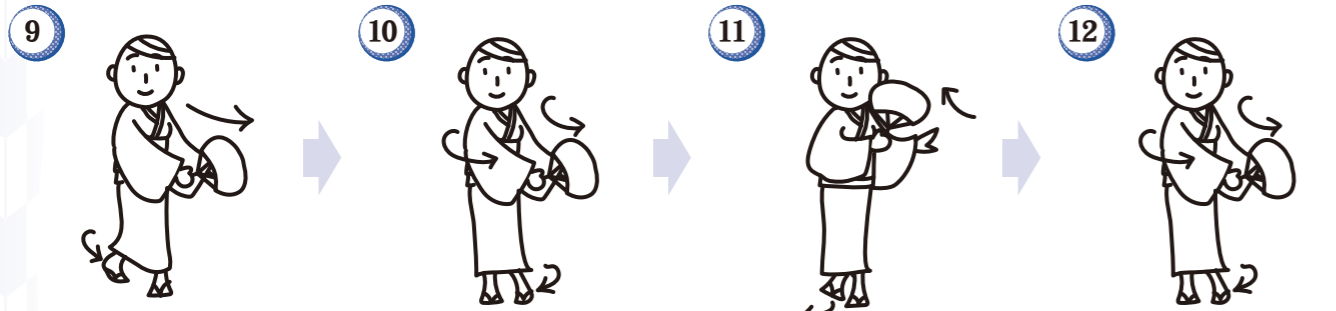


5 胸の前で団扇と手をたたく。同時に右足と左足にあわせる。

6 両腕を外に向かっておろす。同時に左足をあげる。

7 両腕を後方にかくように出し、左足を前に出す。

8 両腕を後ろから前にふりあげ、同時に右足を蹴り出す。



9 少し体を左に向け、左に向かって腕を払う。右足は外から弧を描くようにまわして左足にあわせる。

10 円を描くように再度左下に腕を払う。左足はすり足で内に向かって弧を描くようにまわす。

11 またくっつと円を描くように腕を払い、右足を左足にすりつけながら、すり足で外に向かって弧を描くようにまわす。

12 10を繰り返す



13 円を内側に向かって右手(団扇)を持ち上げる。右足も持ち上げる。

14 円の内側に向かって右手を胸の高さくらいまでおろす。足を戻す。

1 に戻る

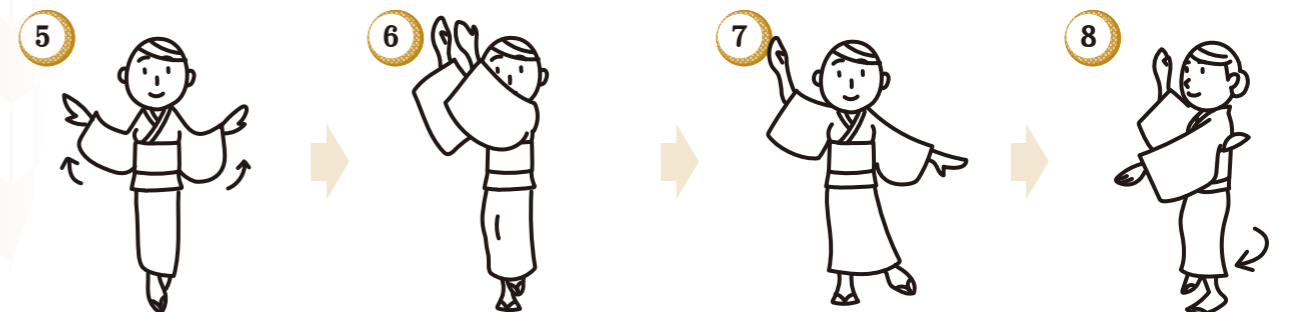


1 左下に腕を払いながら、左足を一步前へ。

2 外に向かって円を描くように腕を持ち上げながら、右足を一步前へ。

3 両腕を右上に向かって上げきって、左足を浮かす。手をちゃんと突く。

4 左下に腕を払いながら、左足をおろし、右を浮かす。



5 外に向かって円を描くように腕を持ち上げながら、右足を一步前へ。

6 両腕を右上に向かって上げきって、左足を浮かす。手をちゃんと突く。

7 左手を伸ばし、右手は曲げたまま、左足を外側に向かって出す。

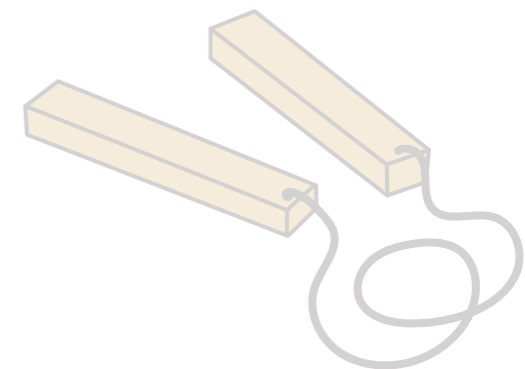
8 左足を軸に内側に向かってまわる。



9 内側に向いたら手を左→右と振る。両足はそろえる。

10 右に振った時に左足を曲げる。

1 に戻る



多聞音頭の踊り方 (女踊り)

動画はこちら



- 1 両手を左斜め下に払い、右足をあげる。
- 2 両手を曲げ顔の右横に持つ。左足を上げる。
- 3 右手はそのまま。左手はおろし、左足を横に踏み出す。
- 4 右足を軸に内側に向く。両手はおろす。
- 5 完全に内側を向いて両手を顔の前に持ってきて、体を左右に揺らす。
- 6 両手は顔の前に保ったまま、左足をあげる。
- 7 両手をおろし、左足もおろす。
- 8 両手を持ち上げていくと同時に、右足をあげる。
- 9 再び顔の前に両手を持ってきて、左足を曲げて持ち上げる。
- 10 両手を左斜め下に払い、左足を進行方向に向かって踏み出す。右足を左足にそろえる。

① に戻る

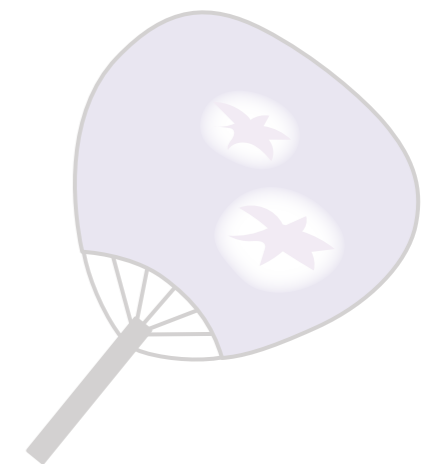
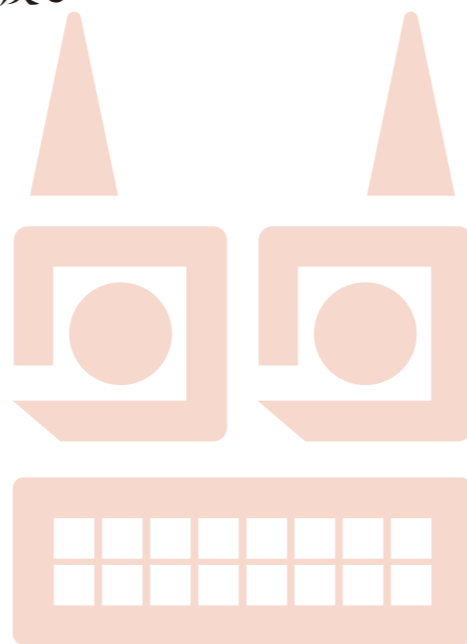
塩屋音頭の踊り方

動画はこちら



- 1 右足と左足をそろえて、胸の前で手をたたく。
- 2 右足を一步前に出す、同時に右腕を曲げる。
- 3 右足を内側に向かって、左足を浮かせる。
- 4 左足を右足よりも前に出す。つま先を地面につけ、両腕を曲げる。
- 5 左足を引き戻していく。
- 6 右足を後ろに引いて前に出し、両腕を右に向かって曲げる。
- 7 右にあった腕を上からまわしながら左方向に持っていく、右足を後ろに引く。
- 8 両腕を右に払いながら、左足を前に出す。
- 9 左足を後ろに一旦引いて、進行方向に出す。
- 10 進行方向に向かって右足を一步前に出す。

① に戻る



下畑の盆踊り

昭和初期の頃には民家の前の広い場所を借りて盆踊りが開催されており、ちびっこ広場(下畑市民公園)が出来てからは公園内で櫓を組んで開催されていた。娯楽の少なかった時代、6〜14歳からなる少年団や15〜25歳からなる青年会が、地域の年寄りの楽しみとして演芸会などの催しに取り組み、盆踊りもその楽しみの一つとして時代劇俳優などに扮した大人の仮装行列も交じって催されていた。昭和40年頃までは播州東條節に合わせて「三つたたき」、「手拭い踊り」と呼ばれる踊りが踊られ、音頭は故森本麻男氏(明治34年生)、中塚義栄氏(昭和4年生)、佐伯登吉氏(昭和5年生)がとっていた。題目は「赤垣源蔵」、「須磨乃仇浪」^{あだなみ}、「御所桜乃口」などで一人が太鼓を叩き、他の二人が掛け合いをする形で交互に音頭をとっていた。この音頭は故森本麻男氏が昭和23年頃に吉川^{よかわ}の方から習って中塚義栄氏、佐伯登吉

氏に教えたもので、二人は須磨寺、関守、多井畑にも音頭をとりに行ったという。それ以前は音頭とりが来て吉川音頭を踊っていたという。中塚義栄氏に聴かせてもらった「赤垣源蔵」は、歌舞伎の台詞まわしのようで、話によると二人で約1時間かけて1節を掛け合うということで、雨で田んぼが休みになれば、家を締め切って音頭の練習をしていたとのこと。音頭の継承に取り組んだこともあるが、時間をかけて繰り返し練習が必要であり口伝するのも中々難しいが、興味を持ってくれる人に伝え残していきたいとのことであった。



● 垂水区伝統芸能発表会(平成13年)

名谷(東名)の盆踊り

かつて老婆講という集まりが主催して、地蔵尊に合わせて東名荒神社社の境内で盆踊りを開催していた。床几を重ねて太鼓を載せた上で音頭とりが音頭を取り、その周りを囲むように踊っていた。

昭和50年頃には老人会が単管で組んだ櫓の回りで、テープを流して踊っていたとのこと。平成に入り老婆講と老人クラブが協力して盆踊りを開催していたが、高齢化のため平成15年から盆踊りの開催を取りやめることとなり、その後は地蔵尊のみ開催しているとのこと。

垂水郷土芸能保存会の理事をしていた平井一郎氏の話によると、近年はJA主催で多聞、舞子、下畑、名谷などの地区が参加するふれあいの盆踊りが、名谷あじさい公園で開催されており、地域の方々が踊る機会があるとのことであった。



● 東名荒神社での開催風景

ご協力者(敬称略)

● 製作協力者

- 舞子音頭保存会の皆様
- 垂水音頭保存会の皆様
- 塩屋音頭保存会の皆様
- 多聞保存会の皆様
- 下畑町の皆様
- 名谷町東名協議会の皆様
- 森本アリ
- 北川武志

(塩屋青年会 垂水郷土芸能保存会臨時会員)

参考文献

- 神戸の民俗芸能 垂水編
- 塩屋音頭のでびき
- 創立40周年記念誌(多聞保存会)
- 歴史のふるさと 下畑物語



垂水の布団太鼓(平成29年10月発行)



垂水の秋の伝統行事(平成30年10月発行)

【編集・発行】

垂水郷土芸能保存会
令和元年8月吉日
神戸市広報印刷物登録 令和元年度第289号(広報印刷物規格A-1類)

【おことわり】

記事の内容・年代・日付・場所などにつきましては、誤り・漏れのないようできるだけ確認しましたが、万一誤り・漏れなどがございましたらご容赦ください。

